

大阪空襲訴訟

謝罪と賠償をもとめて

その日、安野輝子さんは自宅へ母親の帰りを待ちながら、弟や従兄弟たちと遊んでいた。1945年7月16日、すでに米軍は沖縄を陥落させていた。

沖縄から飛来する米軍戦闘機は、鹿児島市の主要都市を連日のように空襲していた。

その日も空襲警報が鳴った。普段は警報が鳴ってから爆撃までにはしばらく時間があるので、防空壕へ逃げ込むことができていた。しかしこの日は違った。警報が鳴り止むが止まないかの内に、「ドーン」という爆音。気を失った。

「お姉ちゃん、痛いよ」弟の鳴き声で我に返る。あたりは又ルナルとした血の海。弟や従兄弟たちが泣き叫んでいる。そのときは不思議と痛みさえ感じなかった。「弟たちをなんとかしなければ」。他人のことを気遣っていた。まさか自分の手足がなくなっているなんて……。

戸板に乗せられて、近所の診療所へ。医師は自分のベルトを抜い

置き去りにされた民間の戦争被害者



大阪空襲訴訟原告団 代表世話人 安野輝子さん

「足は生えてこなかった。」

「太ももの上部をきつく縛ってくれた。このとき初めて「ああ私の足、千切れたんや」と気づいた。病院での治療は、傷口に赤チンを塗って消毒するだけ。毎日消毒しなければ傷口がすぐに腐って、強烈な臭いとともにお汁虫がわいてしまつた。

「二人娘がこんな姿になつてしまつて。できることなら代わつてやりたい」。祖母が泣いている。「おはあちゃん、泣かないで。足なんてすぐに生えてくるから」。

足はもう生えてこないのだ、と知つたのは小学校に入つてから。雨が降れば母がぶつかつて学校へ。つらかつたのは運動会と遠足。

「みんな修学旅行や遠足の話で盛り上がるけど、私、一度も行ったことがないのよ」。

そんな安野さんの人生を支えたのが洋裁。家に閉じこもりがちな少女時代、洋裁学校に行きたい一心で、なれない義足をほめて3年間通いつめた。汗で義足がすべり、接合部分の皮がむける。痛みで「もう歩きたくない」と幾度思ったことだろうか。

1972年、二つのニュースが目にとまる。「全国戦災被害者連絡会が、戦時災害援護法を求めろ」という報道だ。軍人、軍属には補償があるのに、空襲で被災した民間人には何の補償もない。議員立法で「援護法」を作り、謝罪と補償を求めようというものだ。

安野さんたち被災者は18年間、国会に働きかけ、法律は18回上程された。しかし全て廃案または審議未了。

厚生省(当時)に行つたときのこと。空襲で顔面大やけどの小見山重吉さんが「防空壕に逃げたのですが、壕に焼夷弾が入つてきて大やけどを負つたのです」と証言。

「大阪空襲訴訟を知っていますか」5人「プレゼント」ご希望の方は、最終自記のフェイスブックメールでお申し込みを。当選発表は発送をもって代えさせていただきます。

大阪空襲訴訟を知っていますか？

A5版 64頁 定価700円 発行せせらぎ出版 ☎06-6357-6916

空襲被害者

すると厚生大臣は「それは運が悪かつたんですね。やり取りを聞き「なんて冷たい政府なんだろ」と感じた。

「シガ、やられ損やなあ」。小見山さんのつがやきが耳に残る。国会も政府もダメ。こうなつたら裁判しかない。こうして大阪空襲訴訟が始まった。

「私が歩んできた悲惨な人生を歴史に残さないで、また同じこと、戦争が繰り返されてしま



前列、左から3番目が安野さん

勝手に吹田遺産

町の元気な 駄菓子屋さん その10

吹田の町の小学校のまわりをめぐり、駄菓子屋さんを探しに出かけた。末広町から片山町、山手町から千里山へアツタウンの坂道に苦しみながら「無駄足になるかも……」と垂水の町へ、垂水神社の近く、住宅街の中にある子供用の自転車並、角があった。外目にも判るカラフルなおもちゃや菓子。「あつた！ 駄菓子屋さんや」。

「駄菓子屋にた」さんのお店である。店内は3、4歳くらいの子供を連れてお母さんでいっぱいだった。子どもたちは小さな力コを持ち、目線の高さにならんだビンのなかからお菓子を選んでいる。

「ここへ話を聞ける間かな」と近くのレストランで時間をとって小学生が4、5人、店先に出て来た女性に声をかけている。駄菓子屋を専門に始めて16年かな、親の代はここで小さなスーパーやつたんです。子どもは出ていって、お母さんが大好きで、うちでは1000円玉でどれだけ買えるかな？ 20円で買った船にまた20円の当り券がついていたら子どもたちは「さあ買ひます」。横から男の子が「当たったー！」と喜びげに話す。



「海外でマスクするときには気をつけたいよ」海外渡航経験の豊かなお方からの忠告だ。どうも「顔を見られたら困る人」、つまり、これから悪事を働く(すでに働いた)人に見られるらしい。

「安心を。ここは日本である。新型インフルエンザでマスクは飛ぶように売れ、品切れ続出。私の近くにも東北からマスクを調達するものまであらわれた。安心、安全のため吹田がマスク姿で仕事にあたりたい。用心にしたいことはない。

ここに来て、新型インフルエンザへの対応も落ち着きを見せはじめ、街ではマスク姿もめっきり少なくなった。ところが、である。ここ西松マネーについてはマスクがなかなか取れない面々が吹田にいらつしやる。

吹田市長が西松マネー100万円をパーティー券を買つてもらつたという報道から久しい。西松側も「うちの会社がやりました」、口滑り業務のためにと認めている。「知らなかつた」の「マスク状態」はもう通用しない。

中央政界では、政権与党も最大野党も、それぞれマスクもそつちのりで口角泡を飛ばし、党首のクビまですげかえたこの問題。なのに、地方では「マスク状態」で、すっかりなりをひそめている。「冷静な対応は新型インフルエンザに対してこそ必要だし」。

とにかく真相を明らかにする政治的責任が市長はじめ関係者にあることは確かである。

ここは日本である。しかし、この問題でマスクをかけ続ける面々が、どうしても「顔を見られたら困る人」に見えてしまつたのは、私だけだろうか。(とち・はる)



店を午後7時半から8時まで、ちやうど子どもたちの遊ぶ時間にあわせている。「ときどきかりに店を開けてお菓子を帰します」やはり穂さんに心配かけては「レシの奥で、主人が語る。スーパーやコンビニに並んでいる商品を採り、子どもの流行にも気をはかりたいですね。主人は勤めています。話している間も子どもたちがやってきて大きな声でいろいろ振りかけたおやつ菓子を買っていく。まわりの店も子どもたちの宝島なのだ。

ひと時代前まで、小学校の周りにあった文具、模型、駄菓子など扱った商店が消えているのはおもしろい。

そんな中でがんばっている6中校区のMさんは「あの日背の高い君も連れて来て、お母さんお母さん、店の前で一緒に記念写真撮らせて」と言つたや、子どもたちの学校生活の思い出に、店も入つたや、うれしかったなと、話していた。

子どもたちの生活圏にあつたこの通り、子どもたちの元気な